

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13972

研究課題名(和文)音楽科授業における子ども間の協同の成立過程に関する教育実践学的研究

研究課題名(英文)Educational Practice Research on the Formation Process of Cooperation among Children in Music Classes

研究代表者

兼平 佳枝(KANEHIRA, Yoshie)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50613668

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、音楽科授業における子ども間の協同の成立過程について、教育実践学的な研究方法によって明らかにすることである。研究の成果は以下の通りである。

1)デューイの教育哲学を基盤として、協同を「共同活動が生み出す『人と人との関係』」としてとらえ直し、子どもがいかに協同を成立させていくのかについてオキュペーションの分析から明らかにした。そこでは共感が重要であることが示唆された。2)1)で得た理論的視点を基に音楽科鑑賞授業を計画し、小中学校で授業実践を行った。3)協同を協同的な学習の観点からとらえ直し、学習と共感との相互関連性について、音楽科鑑賞授業の分析を通して明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、音楽科授業において子どもがいかに協同を成立させていくのかについて、デューイの教育哲学を理論的背景とした教育実践学的研究を行った。

本研究の学術的意義は、協同の成立を「人と人との関係性」および協同的な学習という観点からとらえ直し、そこでの学習と共感との相互関連性から協同の成立過程を、教育実践学的な研究方法によって明らかにできた点にある。また本研究の社会的意義として、音楽科授業における協同の成立過程における指導者の役割を提示できた点が挙げられる。このことは、今後、現場の教員の音楽科授業において、子ども間の協同を成立させるための環境構成を具現化するうえでの一助になると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the formation process of cooperation among children in music classes by using educational practical research methods. The results of the research are as follows.

1) Based on Dewey's educational philosophy, he reconsidered cooperation as "the relationship between people created by joint activities" and clarified how children establish cooperation through the analysis of occupation. It was suggested that empathy is important there. 2) Based on the theoretical viewpoint obtained in 1), we planned a music appreciation class and practiced it in elementary and junior high schools. 3) I reconsidered cooperation from the viewpoint of cooperative learning, and clarified the interrelationship between learning and sympathy through analysis of music appreciation classes.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽科授業 協同 共感 協同的な学習

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 21 世紀を生きていく子ども達に必要な資質・能力として重要視されているものに、コミュニケーション能力があげられる。特に、他者と協力して異質な集団の中で問題を解決していくという資質・能力は、これからの教育のキー・コンピテンシーとして世界でも注目されている。そこに不可欠になるのが、個々人がお互いを尊重する、対等な関係性としての協同( cooperation )である。平成 29 年改訂の小中学校及び高等学校の音楽科の学習指導要領においては、育成すべき 3 つの資質・能力として「学びに向かう力、人間性等」「思考力・判断力・表現力等」「知識・技能」が示された。それは、音楽科の授業でいえば、単に個人的に歌が上手く歌える、楽器を上手く演奏できるということではなく、それぞれの感性をもった子ども達が複数集まって、個々の知識・技能を発揮しつつ、他者と協力して思考・判断しながら、主体的に 1 つの演奏や作品をつくり上げるプロセスで育成されることになる。しかも、そこでの人間関係は、一部のリーダーが主導して他者がそれに従うというような「主 - 従」の関係性ではなく、各自が「同等で」「対等な」関係性を成立させて音楽活動に取り組んでいくことが重要なのである。しかし、音楽科授業では未だ、合奏や合唱の活動等に取り組んでいれば協同が成立しているという考え方や、音楽そのものが協同の要素を含んでいるという考え方もあり、協同の概念が明確にはなっていない。そして、それらの活動の中では、従前の「主 - 従」の関係性がみられることが多い。

(2) さらに、平成 29 年改訂の学習指導要領解説音楽編では、合唱や合奏等における他者との協力としての「協同」に留まらず、さらに幅広い表現や鑑賞の活動において、子ども一人一人が他者との交流や共感を通して「協働的に」音楽活動をすることを求めている。しかし、ここでの「協同」は「他者との協力」と解釈されるうえ、共感的で協働的な活動に内包するものとしてとらえられている。つまり、共感的で協働的な活動の具現化を前提として協同がとらえられているうえに、その活動の具体的な方法は個々の教師に委ねられているということになる。

(3) 一方で、筆者がこれまでにデューイの経験論に依拠して行ってきた、音楽を聴いて感じたことを、色紙を切り貼りして表していく図形楽譜づくりを取り入れた鑑賞授業や、身体の動きを組み合わせ表していく身体表現づくりを取り入れた鑑賞授業、楽器をつくって音楽を創作する創作授業では、子どもが音楽から感じ取ったイメージを、色や形等の図形や、身体の動き等の媒介物を介して表現させることで、共感的なコミュニケーションが活性化することを導いてきた。そして、共感が起こるには、音楽から醸し出されるイメージを「 みたいな感じ」のような比喩的表現で表し、それがクラスで共有されることが必要で、そのために比喩的表現を使ったコミュニケーションが有効であることも明らかにしてきた。

以上より、研究開始当初の背景には、「協同」には「他者との協力」以上の意味があるのかという問題意識の下、音楽科授業における「協同」に関する理論を明確する必要があると考えた。そのうえで、音楽科授業における、共感的で協働的な活動の過程における「同等で」「対等な」関係性としての協同の成立過程を、理論と実践の往還する教育実践学的な研究方法を通して明らかにすることを目指したいと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、音楽科授業における子ども間の協同( cooperation )の成立過程について、教育実践学的な研究方法によって明らかにすることである。協同が成立していく過程が構造的に明らかになれば、コミュニケーション能力の育成の一助となる音楽科授業デザインを行う上での指針を得られると共に、複雑な人間関係や社会の状況によって醸し出される質をとらえ、円滑に人間関係を構築していくという、慣習的道德にも繋げていくことができると考える。

## 3. 研究の方法

(1) デューイの教育哲学に理論的根拠を求めて「協同」概念をとらえ、音楽科授業を計画・分析していくうえでの手がかりを得る。

(2) 理論研究から導出した「協同」に関する視点を基に音楽科授業を計画し、小中学校で実践する。

(3) 実践した小中学校における音楽科授業を分析し、子ども間の協同の成立過程の様相を明らかにする。

## 4. 研究成果

(1) デューイの経験論およびコミュニケーション論に関する文献より、協同( cooperation )に関する理論研究を行った。そして、そこで得た理論的視点を基に、芸術的経験としての音楽表現活動における子ども間の協同の成立の様相を、子どものコミュニケーションの具体的な姿を通

して明らかにした。ここでは、デューイの『民主主義と教育』『経験と自然』等を中心とした文献研究を踏まえ、コミュニケーションにおける協同を「共通の目的の達成のために、自分が為すべきことを感じ取って、相互の立場や役割を柔軟に交代し相互の期待や要求に反応するリーダー＝フォロワー関係」ととらえることにした。そして、その理論的視点を基に、中学校における芸術的経験としての音楽科創作授業における子ども間のコミュニケーションを分析した。事例分析の結果、子ども間の協同は、表現したいイメージと鳴り響く音や音楽から醸し出される質との関係性を共通問題とした、集団による問題解決の過程において、共同者相互のリーダー＝フォロワー関係として成立していることがわかった。そして、協同の成立では特にフォロワーとなるうえで、共感が大きく機能していることも明らかとなった。

(2) デューイ教育哲学に基づく協同に関する理論を精緻化すべく、デューイの『民主主義と教育』における共同活動に関する記述から、協同(cooperation)に関するキーワードを整理して、協同に関する理論の見直しを行った。ここでは「a. 活動の完成への共通の興味と目的の共有」「b. 事物や行為を介在した状況の共有」「c. 自他の活動の関係づけ」の3つの条件によって成立する共同活動が生み出す「人と人との関係」を協同とみることにした。そして、共同活動はオキュペーションにおいて行われるから、デューイ・スクールにおいて実施されたクラブハウス・プロジェクト<sup>1)</sup>のオキュペーションの事例分析を行った。分析の結果、協同はつぎのように確立されることがわかった。まずは、「a. 活動の完成への共通の興味と目的の共有」が前提となり目的が共有されると、活動完成時の対象となる生産物が明確化され「b. 事物や行為を介在した状況の共有」が為される。状況が共有されると、活動の完成に向けて「c. 自他の活動の関係づけ」が行われる。「c. 自他の活動の関係づけ」<sup>11)</sup>の具体的要素としては 活動の調整 役割と責任 臨機応変なリーダー＝フォロワー関係 の3つがあり、事物や行為を介在した状況の変容に応じて3つを組み合わせた形で行われる。

(3) これまでに得た協同に関する理論的視点を基に、小学校と中学校で音楽科鑑賞授業を計画し、実践した。オキュペーションでは共同活動が行われることから、今回はオキュペーションとしての図形楽譜づくりの音楽科鑑賞授業を行うことにした。図形楽譜づくりの音楽科鑑賞授業とは、音楽を聴きながら色紙を切って、知覚し感受したことを表す図形をつくり、音楽の構成に対応させて模造紙に貼っていく活動を取り入れた授業である<sup>2)</sup>。そこでの具体的な学習指導案については、それぞれの学校の授業者と協議して作成した。

(4) これまでに得た知見を踏まえつつ、協同を協同的な学習という観点からとらえ直し、そこでの共感との関係性を検討した。共感については、デューイの『心理学』に理論的根拠を求め「コミュニケーションにおいて、自己内に他者における経験を再生し、その他者の経験に浸透する〔状況の質(feeling)〕を感じる」ととらえることにした。そして、協同的な学習を実現する図形楽譜づくりの音楽科鑑賞授業において、共感が起こる過程に学習がいかに関連しているのかについて明らかにすることを目的として、中学校での図形楽譜づくりの鑑賞授業の事例分析を行った。ここでの学習とは、音楽科における教科内容<sup>3)</sup>を踏まえ「学習者が他者と共に音楽と相互作用を行い、音楽の形式的側面を知覚し、内容的側面を感受したことを言語化し、二重構造をもつ意味が学習者相互に共有される」ととらえた。研究の結果、本事例における図形楽譜づくりの鑑賞授業では、共感が起こる過程において、学習は以下のように関連することが明らかとなった。まず、生徒に「図形の意味が何かを知りたい」という、学習への欲望となる問題が生じた。生徒が問題を解決しようとする過程では、問題を解決してくれそうな図形の作成者の発言は、作成者から、作成者自身が感受した音楽の内容的側面、すなわち、音楽が生み出す質を強調した言語化を引き出すと共に、解決すべき問題を、音楽の質へと焦点化した。さらにそのことは、生徒から 問題を解決してくれそうな他者への積極的な興味 を引き出した。そして、生徒が問題解決に向けて教師が流す音楽を聴くと、生徒は、音楽との相互作用に形成された〔状況の質〕と共通する〔状況の質〕を伴う 自分自身の感情的経験を想起した。その結果、生徒に共感の条件が整い、問題を解決してくれそうな他者への共感が起こり、他者と音楽の形式的側面も共有されて問題が解決され、双方に意味が共有され学習が成立した。そして、この研究結果から、問題解決の過程における共感が共同体形成に繋がる可能性が見出せた。

以上より、本研究では協同に関する理論的背景をデューイ教育哲学に見出し、その成立過程を教育実践学的な研究方法によって明らかにすることができた。オキュペーションとしての音楽科授業においては、協同は共同活動における問題解決の過程で共感が起こることによって成立する。そして、そこでは共同体形成の可能性も見出すことができた。

#### 引用文献

1) Katherine Camp Mayhew and Anna Camp Edwards, The Dewey School : The Laboratory School of the University of Chicago, 1896-1903, Appleton-Century Company, New York, 1936, pp.220-236.

キャサリン・キャンブ・メイヒュー / アンナ・キャンブ・エドワーズ(小柳正司訳:2017年)「第12章 特別な実験活動 グループ (13歳)」小柳正司監訳『デューイ・スクール シカゴ大学実験学校:1896年～1903年』あいり出版, pp.123-131.

2) 小島律子編著(2011)『子どもが活動する新しい鑑賞授業 音楽を聴いて図形で表現してみよう』音楽之友社, p.19

3) 音楽科における教科内容とは 形式的側面(音楽の諸要素とその組織化)、 内容的側面(音楽の質、曲想・特質・雰囲気)、 文化的側面(風土・文化・歴史)、 技能的側面(表現の技能、鑑賞の技能(批評))となる4側面に整理されている。

西園芳信(2005)『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究』風間書房, pp.78-80 / 西園芳信(2015)『質の経験としてのデューイ芸術的経験論と教育』風間書房, p.187

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 兼平佳枝	4. 巻 70
2. 論文標題 芸術的経験としての音楽表現活動における子ども間の協同の成立の様相	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要. 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32287/td00032234	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 兼平佳枝	4. 巻 71
2. 論文標題 学校における社会的探究を通じた協同の確立 J. デューイの「オキュペーション」の事例からの検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 149-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32287/td00032511	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 兼平佳枝	4. 巻 27
2. 論文標題 図形楽譜づくりの音楽科鑑賞授業にみる学習と共感との相互関連性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学校音楽教育研究	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 兼平佳枝	
2. 発表標題 学校における社会的探究を通じた協同の確立 オキュペーションの事例の場合	
3. 学会等名 日本デューイ学会	
4. 発表年 2021年	

1．発表者名 兼平佳枝
2．発表標題 図形楽譜づくりの音楽科鑑賞授業にみる学びと共感との相互関連性
3．学会等名 日本学校音楽教育実践学会
4．発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高田 遥  (TAKATA HARUKA)		
研究協力者	北尾 祐子  (KITAO YUKO)		

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------